



Echo No.163  
令和4年 正月

院寺寺寺  
峰福林禅  
一禅禅宗  
\* \* \* \*  
羽村臨濟会

## 「夫婦別姓」という危うさ

「正月は冥途の旅の一里塚」だそうです。実際は目出たいよりも、死に近づいているわけです。これが自分のことだけなら大した問題ではないのですが、こと日本全体が冥途の旅にあるとすると、これはただ事ではありません。実は最近とみに祖国日本の存亡が心配になってきたのです。

世界情勢の分析は世に数多い賢者たちに任せるとして、ここでは昨今に付く身近な問題である「夫婦別姓」について、少々考えてみたいと思います。

うことです。極論すれば、嫁は子どもを産むための道具であって、他の何ものでもないのです。夫が死んだ後、財産分与はあるのでしょうか。

「夫婦別姓」というのはこういうことです。決して新しい考え方ではなく、封建的な一面もあるのです。仕事に不便だという功利的な理由で以て、夫婦は同姓という極く普通の習慣を変えてしまつて良いのでしょうか。

それにお墓はどうするのですか。子どもはどうするのですか。夫婦・親子別姓では同じ墓には入れないでしょう。いや墓はいらない、散骨があるさと言うかも知れませんが、寺も墓もない不安定さ、心細さを一生背負って生きていかなければなりません。

この夫婦別姓の問題は近未来の日本に横たわる数々の問題の一つです。これらの心配ごとが杞憂に終わり、五十年後・百年後も日本が存在していることを、心から願っています。

(禅福 泰文)

鎌倉流御詠歌を味わうこえいか

【いろは和讃】

春の朝あしたのさくら花

秋の夕ゆふべのしらぎくと

四季おりおりの咲く花の

いろは匂えど散りぬるを

此の花もおなじ運命さだめにて

暫とどし止まる事もなく

たとえば水の流ること

わがよ誰ぞ常ならん

照る日曇る日雨にかぜ

おぼろ月夜やさつき闇

うつり化かしげき旅の空

有為の奥山今日こえて

薫やかずらのいばら道

ふみわけくればさやけくも

高嶺の月ぞすみわたる

浅き夢みじえいもせず

作詞 菅原義道和尚

いろは歌といえは昔は国語教育の第一歩として使われているもので、日本人にはおなじみの歌です。

「色は葉は匂へど 散りぬるを

我が世誰ぞ 常ならむ

有為の奥山 今日越えて

浅き夢見じ 酔ひもせず」

漢字に示すと右のようになるそうです。

いろは歌は元々『金候明最勝王経音義』

が文献上の初出だそうで、仏教の經典の

“音義”、つまり文字の発音のアクセ

ントなどを理解するための注釈書に掲載

されていたそうです。元々この歌は詠み

人知らずでもあり、時代を経るうちに

様々な意味合いの解釈がなされました。

一部ではキリスト教（ヘブライ語）との

関係性もまことしやかに語られるようにな

つてもいるようですが、内容を素直に

読み取ってみると仏教の無常観、つまり

限りある命の儚さが分かりやすく詠ま

れていることが分かります。

ここ二年のコロナは混乱を我々に混乱

をもたらしましたが、同時に命の儚さも

感じさせてくれました。現代は誰しもが

お医者さんのお世話になることができ、

高度な医療の恩恵を受けることが容易く

なっています。その分、昔とは違って寿

命が延び人生八十年とも言われます。しか

し寿命こそ伸びたものの、残念ながら命

というものは最初から永遠に続くものでは

ありません。死というものは必ずあり、

今日生きているからといって、明日が確

実にやってくるわけではないのです。そし

て、それはコロナが始まる以前からもず

つとそうだったはずで、我々の命は儚

いものです。しかし、儚いからこそ命は

尊いものであり、家族や友人や大切な人

と一緒にいれるということが、とても有

り難いものになるのだと思います。

令和四年が始まりました。この一年が

皆様にとつて素晴らしい一年となること

をお祈り申し上げます。

（宗禪 和正）

# 禪と共に歩んだ先人

## 山岡鉄舟Ⅷ

臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するといふ趣旨で進めていこうというこの項で

すが、前回に引き続き、幕末より明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも大きな影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話をさせていただきたいと思ひます。

### 清河 暗殺

江戸に戻った清河八郎ならびに浪士組ですが、京へ出発後に応募に応じた百六十人余りを加えて四百名にもならんとする大所帯となりました。それが八郎の計画する攘夷決行の手兵となるといふ、より危うい状況を作りました。

八郎の計画は、先ず外国人の多く居る横浜を襲撃、市中に火かけ、外国人を斬

る、黒船を焼き払う、神奈川の本營を攻撃して軍資金を奪い、厚木街道から甲府城を奪い、勤皇攘夷の義軍を起こすといふ壮大なものでした。幕府にとって八郎は再び危険な人物として睨まれます。前回とは違い早急に暗殺する必要に迫られていたのです。

八郎は安全を考えて行動していましたが、日頃の言動が俊烈な事もあって個人的に恨みを持つ者も多く、結局それが仇となつてしまいました。浪士組取扱役を勤める者数名に虚をつかれて落命する事となつたのでした。この時八郎は三十四歳、鉄舟は二十八歳でした。

八郎との交友により疑いをかけられた鉄舟は再び謹慎処分となりました。八郎と盟友といえる間柄になつた事は鉄舟にとつてその後の人生を変える大きな転機となつたといえるでしょう。八郎の高い見識に学ぶ面も多かつたでしょうし、志士達との交友で多くの友人を作り、また鉄舟の手柄に惚れ込んで弟子となつた者

達もいました。それらは永く鉄舟を支えていく事になりました。

ただその間、鉄舟の禪の修行は停滞気味だつたとの事です。スランプといつていいでしょう。この謹慎を機にもう一度己をみつめ直した鉄舟は、それ迄を取り返すかの様に、その禪的境涯を深めていきます。そこで培われた胆力は風雲急を告げる幕末に大いに發揮される事となるのでした。

弱体化した幕府に対し、薩摩藩、長州藩が中心となり、武力で倒そうとする動きが高まる中で、当時の將軍徳川慶喜は政権を朝廷に返上するといふ「大政奉還」を奏上しました。それを受け朝廷より「王政復古の大号令」が発せられ、江戸幕府は廃絶となりました。ただ徳川家は存続しており、その存在を危険視する薩摩藩、長州藩の挑発に乗せられる形で「朝敵」となり、「鳥羽・伏見の戦」に端を発する「戊辰戦争」に巻き込まれていきます。以下次号 (一峰 義紹)



# 禅寺雑記帳

水であり、神田上水も水が少なく、玉川上水の水を助水して足しているのが、江戸で使われる水は結局のところ、ほとんど羽村の水であったこと。

◆昨年十一月に、NHKの番組『プラタモリ』で、羽村が紹介されました。タイトルは「江戸の水―江戸の水が東京を潤す?」で、玉川上水、まいまい井戸などが紹介されました。しかし肝心のタモリさんが羽村に来ませんでしたし、情報も大雑把だったのがとても残念でした。以下に出来れば番組で紹介して欲しかった事をあげてみます。

◆王子の王子製紙や大蔵省の印刷局は千川用水の水を使っていた(昭和四十六年まで)ので、羽村の水で日本の紙幣が作られていたこと。

◆狭山湖(山口貯水池)と多摩湖(村山貯水池)は埼玉県にありながら都民の水がめとして作られた人工湖で、その水は羽村から横田基地やIHI工場等の下の地下水道で送って水を貯めていること。

◆恵比寿のエビスビル工場は三田用水の水を使っていた(昭和四十九年まで)ので、羽村の水で日本を代表するビルが作られていたこと。

◆神田上水、玉川上水、千川用水、三田用水、青山用水、本所用水の六つを「江戸の六上水」というが、神田上水と本所用水以外の四つは全て玉川上水からの分

◆明治三年、玉川上水に船が通って多摩の野菜、茶、織物、薪、木炭、山梨や長野のぶどうや煙草の葉が東京へ、東京からは米、塩、魚などが大量に安価で運ばれ流通が一気に広がったこと。

◆この通船事業を中心に行ったのは羽村の指田氏、福生の田村氏、立川の砂川氏で、いずれも玉川上水の管理を担っていた名士だが、最盛期には百を越す舟があり、その半分以上がこの三人のものだったこと。

◆この通船事業は東京から多摩、山梨、長野まで広いエリアに莫大な経済効果を及ぼしたが、水が汚れて飲料に適さなくなるとしてたった二年で中止になること。

◆折角盛んになった流通をなんとか出来ないかと、先の三人が中心となって甲部鉄道(今の中央線)と青梅鉄道が作られたこと。

◆羽村が生んだ文豪、中里介山に英語を教えたのは福沢諭吉の弟子であった指田氏(先の息子)この人が「奥多摩」という名称を考えたと、奥日光や奥飛騨など「奥」の元祖はこれであること。

◆羽村には養蚕など、伝えたいことはまだまだ沢山ありますが、このくらい情報を入れて井上陽水さんの「♪未来のあなたに」と終わっていたら羽村の凄さが日本中に知って貰えたのにと、少し残念です。私達それぞれが郷土、羽村を知り、愛してその素晴らしさを縦に横に伝えて生きましよう

(禅林 恭山)